

メゼンティウスと日本鬼子（リーベン・クイズ）

——ウエルギリウスの叙事詩と日本兵の歴史的体験に関する比較考察——

小 川 正 廣

Illud vel aspersione aquae vel dierum numero tollitur; animi labes nec diuturnitate
evanescere nec amnibus ullis elui potest. (Cicero, *De Legibus*. 2.24)

肉体の穢れは注ぎの水や過ぎた日数によって取り除かれるが、精神の穢れは長い時の経過によっても消えないし、どんな川の流れによっても洗い流すことはできない。

al nimium faciles, qui tristia crimina caedis

fluminea tolli posse putatis aqual (Ovidius, *Fasti*. 2.45-46)

ああ、君たちは何と気楽なことか。人殺しのひどい罪を
川の水で取り除けると思っているのだから。

1. はじめに——日本鬼子について

「日本鬼子」(Riben guizi リーベン・クイズ)とは、現代の中国語圏(中国、台湾、シンガポール)において日本人を指して用いられる最大級の蔑称である。かつての日本には「チャンコロ」という中国人に対する差別的呼称が存在した。しかしそれに比べて日本鬼子という語には明らかに、たんに相手を卑小視して見下す気持ちのみならず、日本への恐怖と憎しみも込められている。そもそも「鬼」とは人間ならば誰でも避けて逃げる「恐ろしい怪物」である。そして「鬼子」とは「ちっほけな」その化け物(鬼)を意味する。現在でもまだ使われているこの日本鬼子という中国語の文献上の正確な由来や初出については詳らかではないが、歴史的に見てその呼称が最も広く浸透したのは、20世紀の抗日戦争下の中国大陆においてであることは疑いないだろう。中世以来伝統的に中国では、自国に侵入して敵対的な行動を起こす日本人の集団をしばしば「倭寇」(Wokou)すなわち倭人の盗賊と呼んでいた。ところが近代には、日清戦争後から日本人をむしろ「鬼子」(Guizi)と称するようになった。つまり19世紀末には、たんに「鬼子」というだけで日本人を指したのである。一方不幸にも日本以外の外国からも侵略を受けた中国では、「鬼子」のみでもつばら日本人を意味したので、この蔑称を他の外国に適用する際、例えば西洋人一般を「洋鬼子」(Yang guizi)、またイギリス人を「英国鬼子」

(Yingguo guizi) などと地理的に限定する語を付して呼んだ。そのため、その後日本人を指す場合にも、それに準じて「日本鬼子」という結果的には同義の呼称を二つ重ねた一種の冗語 (redundant) 的表現を用いるようになったのである⁽¹⁾。そしてこの蔑称をより広く、かつ今日にいたるまで根深く定着させたのは、1937年の「南京大虐殺」(the Rape of Nanking, the Nanking Atrocities) に代表される、第二次世界大戦前とその最中に中国民衆が日本から受けた大規模な戦争被害であった。

20世紀において日本と中国が交戦状態になったのは、1931年の柳条湖事件に端を発した満州事変から、日中戦争(支那事変)を経て、1945年の日本の降伏による太平洋戦争(大東亜戦争)の終結にいたるまでの約14年間である(いわゆる「十五年戦争」)。とりわけ日中戦争時の1940年後半からの中国大陸での戦局は苛烈をきわめ、その頃から日本軍は、中国での自国の権益と軍事勢力の拡大を阻もうとする八路軍(中国共産党軍)の組織や根拠地を徹底的に破壊するために「熾滅・掃蕩作戦」を実施した。この日本軍の攻撃手法は、当時の中国人によって「三光政策」という言葉で呼ばれた。「三光」とはすなわち、「焼光」(焼きつくす)、「殺光」(殺しつくす)、「搶光」(奪いつくす)を意味しており、のちの日本人戦犯たちの供述記録などにしたがえば、それによって中国が受けた具体的な被害や違法な加害行為の例としては、中国兵捕虜と民間人の大量殺戮、拷問による公人・私人の殺害・致死・不具化、公共物の破壊、私財の略奪、放火、婦女子の暴行と殺害・致死、民間人の拉致・強制連行(強制労働や「慰安婦」としての従軍のため)、阿片の専売流通による利的搾取と民衆の大量廃人化、毒ガス戦、軍事目的の生体解剖・人体実験、細菌兵器の実験と使用などが挙げられる⁽²⁾。こうした当時の戦争被害の実態については、戦後67年を経た今日なお全貌が十分明らかになっておらず、事実の全容の解明はまだ続いている。しかし他方、当時日本の軍隊の中であって現地で戦った人々が、それぞれみずからの立場からこの戦争をどのような物理的・精神的条件の下で行っていたのかという点に関しては、われわれは生き残って帰国した元日本兵たちの貴重な証言から一定の直接的情報を得ることができる。またわれわれは、それらの過去の行為と事実に対する当事者たちのその後の認識のあり方も知ることができる。

そうした貴重な証言を戦後世代のわれわれに対して積極的に提供しようとしてきた人々のうちの多数は、1945年の戦争終結後にソ連のシベリアと中国で捕虜となり、最終的には中国の収容施設から戦犯としての罪を免除ないし軽減されて生還した人々である。彼らは帰国後自発的に、戦中と戦後の中国での体験を日本人にできるだけありのまま伝えたいと望み、自分たちが軍人・兵士・個人として中国で何を行ない、どのようにして文字どおり「日本鬼子」になっていったのか、またなぜ敗戦後に捕えられた自分たちが無事に故国へもどれたのかということについて、当時の周囲の状況とみずからの精神状態の両面を省みながら、市民への講演、展示の企画、新聞・雑誌記事の執筆や著作の出版、放送番組への参加などの多様な活動を通じて語ってきた。そして彼らの一部(14名)は、日本で制作されたドキュメンタリー映画にも語

り手・証言者として出演しており、2001年に公開・上映されたその映画のタイトルは、まさに『日本鬼子』(リーベン・クイズ)であった(副題「日中15年戦争・元皇軍兵士の告白」、英語題: *Japanese Devils: Confessions of Imperial Army Soldiers from Japan's War against China*。2001年ミュンヘン国際ドキュメンタリー映画祭特別賞などを受賞)⁽³⁾。

ところで終戦後に中国での戦争の語り部となった元日本兵たちの多くは、戦後彼らが収容された中国の撫順戦犯管理所(彼らの一部は太原戦犯管理所に収容)での体験を語っている。そしてその中で彼らがほとんど異口同音にわれわれに伝えているのは、中国の管理所での思いがけない手厚い生活待遇と、めいめいが自分の戦争犯罪のすべてを直視しながら行なった精神的苦痛に満ちた告白(坦白タンパイ)と認罪、そして彼ら自身の意志と判断によるその認罪という行為を穏やかに忍耐強く見守った中国人職員たちの理性的な姿勢である。当時の中国政府が指示した戦犯管理所の運営方針は、(1)日本人戦犯を罵ったり、手を掛けてはいけない、(2)医療の完全を期し、一人も死なせてはいけない、(3)食事は日本の民族習慣にあったものにする、であったという⁽⁴⁾。1950年からほぼ6年間にわたる管理所での生活と認罪を経て、両管理所に収容された当初には1109名だった戦犯容疑者のうち、自殺者や病死者を除く圧倒的多数の1017名は、最終的に1956年の瀋陽と太原での特別軍事裁判の最中に起訴を免除(猶予)され、法的には戦犯にならず、即時釈放を言い渡された。さらに、特別軍事裁判で禁固刑などの有罪となった45名の戦犯についても、実際の刑期は大きく短縮され、8年以内に全員が帰国を果たした⁽⁵⁾。

この一連の出来事は、それを体験した当事者たちの戦後の熱心な活動にもかかわらず、日本国内では一般に中国での戦争の罪過が真剣に問われない風潮のためにまだ十分認知されてはいないが、それを知る人々の間で「撫順の奇蹟」という名で呼ばれてきた⁽⁶⁾。みずからの罪責を認めた事実上の多くの戦犯の大半が起訴を免じられ、法廷に立ったわずかな戦犯も極刑や無期懲役を免れて軽い刑罰で赦されたというこの成り行き自体が、まず世界史上稀な「奇蹟」だと言えるであろう。しかしこの奇蹟の全体は、けっして政治的・法的観点からの分析だけではその真相を理解できるものではないだろう。むしろ裁判をめぐる奇蹟は、結果として外に現われた事態であり、それを最終的に成立させた元日本兵たちと戦犯管理所の中国人職員たち——彼らは直接の被害者でありながら戦犯らと長期間身近に接触した——の双方の心中にこそ、公的な釈放と判決の前から、すでに稀に見る奇蹟は起こっていたと考えるのが妥当である。

たしかに、最初に日本人戦犯たちに対するこの寛大処理の基本方針を決定したのは1949年に成立した中華人民共和国の新政府であり、とりわけその政策を積極的に支持して粘り強く推進したのは、国家主席毛沢東の片腕と言われた政治家周恩来だったと伝えられる⁽⁷⁾。しかし、例えば多くの記録や証言によると、管理所生活を経て中国から日本へ帰還した元日本兵たちと、かつて彼らを管理し世話した中国人所員たちは、その後も終生変わらぬ友となり、互いに尊敬の念を抱き続けたと言われる。甚大な戦争被害を受けた中国民衆一般の激しい反発と「義

憤」を制し、敗戦国の非道な戦犯たちに対する画期的な方針を打ち出した中国政府の幹部たちも、当事者たち個人の心理と感情の深部にこれほど大きな転換が生じうることまでを、はたして予期ないしは期待していたであろうか。彼らの「人道的」方針はおおむね、当時成立したばかりの新国家を取り巻く内外の情勢を十分に見据えたうえでの政治的判断にもとづくものだったはずである。いずれにせよ、戦犯収容の期間中にこれら一群の日本人と中国人は、最初の互いに対する不信と敵意を次第に捨て去り、じつに不思議にも本心から相互に信頼の念を抱くにいたった。あたかも鬼の集団に大切な肉親を食われた人々が、憎んでも憎みきれない鬼どもを、やがてそれぞれ立派な人間であると心から納得させられ、彼らとしっかり握手を交わすほどまで、双方の心境は大きく変化したのである。「撫順の奇蹟」の本質を理解するには、その渦中にあった加害者自身と被害者自身の双方に生じた、このような容易には信じがたい精神的変化の条件と構造をよく考察してみることが必要であろう。

奇蹟は通常では起こらない一回限りの出来事であり、それを意志的に再現させることはおそらく不可能である。そのうえ「撫順の奇蹟」は、それを生ぜしめたような悲惨な事態が再度起こらないために語り継がれている。しかしそれ自体はもう二度と起きて欲しくない民族間の争いに起因して生じた奇蹟であっても、その稀少な歴史的体験から、今後の共存と共生のために何かをともし学ぶことはできるのであり、そこから学んだことを現在と未来の苦境の中で互いに役立てることもできる。そう考えないならば、この人類史上稀に見る「奇蹟」は、文字通りたんなる過去の珍しい例外的事例の一つとして化石化してしまい、いつかはその意味もすっかり忘れ去られて、不幸な歴史は再び繰り返すかもしれない。

さて本稿では、現代史上まさに「鬼子」そのものと化して中国で悪名を馳せた日本兵たちをめぐる奇蹟的なストーリーの構造と意味について、ローマ詩人ウェルギリウスの古典叙事詩『アエネイス』後半の戦争の物語において最大の「鬼」として登場する人物メゼンティウスの描写と比較しながら考えてみたい。

2. 神々を蔑むメゼンティウス

メゼンティウスとは、『アエネイス』において、ローマ人の最初の祖先となるべき主人公アエネアスがトロイア陥落後の長い放浪ののち目的地イタリア中部に到着したとき、トロイア勢の定住とラティウム王家とのアエネアスの婚姻を阻もうとする英雄トゥルヌスが率いるイタリア軍に加担して戦ったエトルリア人の王である⁽⁸⁾。イタリアでの戦争を語る作品後半（7～12巻）初めの第7巻の末尾には、反トロイア人の主張の下に結集したイタリア勢を構成する戦士らがカタログ風に列挙されるが、メゼンティウスはそこで最初に述べられる強豪の勇士である（*Aen.* 7.647-654）。物語後半の戦いにおいてこの人物は、読者の予想通りトゥルヌスと並ぶ強敵として現われ、とくに第10巻での両軍の全面的対決となった戦闘では、トロイア軍に対し

て猛烈な攻撃を加えたのち、アエネアスとの決闘において討たれて死ぬ。しかしその激しい戦闘でトロイア軍とイタリア軍の両陣営はいずれも多大の犠牲を払い、かろうじて優勢となったトロイア方もやがてイタリア側からの休戦の申し出を受け入れることとなる (*Id.* 11.100ff.)。

このようにメゼンティウスはトロイア人がローマ民族の礎を作るという「運命」の実現にとって大きな障害として立ち塞がる者として登場するが、しかし物語の中では、彼はたんに戦いで勇猛な人物としてのみ描かれているわけではない。この人物は、次に引用するイタリア軍のカタログにおいて「神々を蔑む者」(*contemptor divum: Aen.* 7.648) と冒頭で言及されるように、とりわけ傲慢で狂暴な性格の人間として描かれている。

先頭に進みゆくは、エトルリアの岸から来た暴虐な男、
 神々を蔑む者メゼンティウスで、隊列を武装させる。
 その傍らには息子ラウススがあり、これより美麗なる者は
 ラウレンテス人トゥルヌスの他にはなかった。
 ラウススは馬の馴らし手であり、野獣を御する男だが、
 彼が率いるは、アギュラの都から甲斐もなく従った
 千人の勇士たち。父の権威に従う彼は、父がメゼンティウス
 でないならば、もっと幸せになれたはずである。 (*Aen.* 7.647-654)

このカタログの冒頭の一節では、メゼンティウスは美しい息子ラウススとともに参戦したが、自分に忠実なその息子にはふさわしくない父親として語られ、またこのメゼンティウスの息子と軍隊は、王自身の「暴虐な」(*acer: 647*) 性格と神々への不敬ゆえに不運な最後を迎えることが予示されている。それでは、メゼンティウスは実際何ゆえに狂暴で非道な王であると言われるのか。その事情は、次の第8巻において、アエネアスの新たな同盟者となる、ギリシアのアルカディア出身でティベリス河畔のパランテウムを支配する老王エウアンデルによって明らかにされる。エウアンデルはメゼンティウスについて、トロイアの英雄に次のような情報を伝える。

ここから遠くない所に、古い岩の上に築かれた居住地
 アギュラの都がある。そのエトルリアの峰に
 かつて戦で名高いリュディアの民が住みついた。
 ここは長年栄えていたが、のちにメゼンティウスという王が
 傲慢な権力と強暴な兵力によって支配下に置いた。
 なにゆえに語れようか、あの暴君による言葉に絶する殺人と野蛮な
 所業を。どうか神々よ、その報いをいつか奴自身と一族に受けさせたまえ。

いやじつに彼奴は、死人の体を生きた人間に縛りつけ、
 手には手を、口には口をぴったりとくっつけさせた。
 何たる拷問であることか。屍の腐敗した体液でぐっしょりと濡れた体を、
 悲惨な抱擁の中で、ゆっくりと死を味わわせながら殺したのだ。
 しかしこの非道な狂人を、ついに精根尽きた市民たちが
 武装したのち、その館とともに包囲して、
 彼奴の仲間を斬り殺し、屋根に火を放った。
 だが彼奴は殺戮の合間をすり抜けて、ルトゥリ族の領地へ
 逃亡しトゥルススの客分となり、その兵力に守られている。 (Aen. 8.478-493)

中国や韓国やシンガポールの抗日戦争記念館や歴史博物館などに行くと、しばしばかつての日本軍によるさまざまな拷問の様子が再現展示されており、とりわけ「海戦」(大量の水を飲ませて吐きもどさせることを何度も繰り返す)、「空中戦」(体を天井に吊るし上げて棒で強打する)、「火責め」(焼き鑊で体を焼く)、「机拷問」(机の下に潜らせて足で激しく蹴る)、「開脚ひねり」(椅子に座らせて股を開かせ、その中へ斜めに棒を突っ込んでひねり回す)、「電気ショック」(手足を机などに固定させて電流を体に流す)などが悪名高い。また中国では拷問を受けた末、おびただしい数の人々が法を適用しない「特移扱い」(特別移送扱い)という名目で「マルタ」(丸太)と称され、ハルビン郊外にある関東軍防疫給水部本部(通称「731部隊」または「石井細菌部隊」)へ搬送されたのち、陸軍軍医らによる人体実験や生体解剖の被験者にされて殺害された⁽⁹⁾。さらに、拷問としてではなくとも、日本兵が殺した中国人の肉を料理して食したり⁽¹⁰⁾、死んだ中国人の脳髓を性病の治療の特効薬になると信じて食べたりした⁽¹¹⁾という身の毛がよだつ報告さえもある。生きた人間を腐敗していく死体と長時間密着させてじわりじわりと殺すというこのメゼンティウスの拷問も、そうした日本軍の拷問や人食行為(cannibalism)にまさるとも劣らず残酷である。セルウィウスの古注によると、この特異な拷問はそもそもエトルリアの海賊が行っていた習慣の一つであったとされる(典拠はキケロの『ホルテンシウス』)⁽¹²⁾。ウエルギリウスはそのおぞましい行為を同じエトルリアの一地方の支配者メゼンティウスの所業として語り、この人物の残虐さに現実味を与えるとともに、読者が彼に対して最初から強い反感を抱くように創作したのである。さらに上記の引用では、平和に栄えていたアギュラの住民をひどく苦しめたメゼンティウスは、元来は外部から侵入してきた「戦で名高いリュディアの民」に属し、みずからの強力な軍事力でその地に圧政を敷いたと語られている。彼の拷問の理由はとくに示されていないが、その文脈から、住民たちに深い恐怖を吹き込んで従順にさせるためであったと読み取れる。外部から来た横暴な支配者の加害と以前は平和だった地元の被支配民の被害という物語におけるこの関係の構図も、戦中に日本の軍隊が中国の領土に入り込み、罪のないその民衆を暴力的に虐げた歴史的状況と類似

している。

続くエウアンデルの話によると、メゼンティウスの野蛮な拷問と暴政はついに全エトルリアの住民の決起を促したという。「激しい義憤」に駆られたエトルリア人たちは、武器を取って立ち上がり、処罰のために王の身柄の引き渡しを求めたのである (*Aen.* 8.494-495)。戦後の中国人たちが示した日本軍の蛮行に対する「義憤」の噴出もまた、それと同様にすさまじかったと伝えられる。例えば、元陸軍中將で第59師団長を務め、戦後瀋陽の特別軍事裁判では禁固刑を言い渡された戦犯の藤田茂は、その裁判において日本軍に一家を皆殺しにされた中国人の62歳の老婆が証言に立ったとき、彼女が「怒りのために体が震え出し」て「物凄い形相」となり、「白髪まじりの頭髮は憎しみで逆立」ち、「テーブルを乗り越え私 [被告席の藤田] に飛び掛からんとばかりの有様」になったことを「生涯消えることはない」記憶として回想している⁽¹³⁾。

こうした状況を示したのちエウアンデルは、エトルリアの全住民が組織した「メゼンティウスへの正当な怒りに燃えた」(*furiis justis: Aen.* 8.494) 軍隊が、古い師による予言にもとづき「異国の者」を統率者として必要としていると言う。そしてギリシア人の自分がその依頼を受けたが、老齢のゆえに適さないので、トロイア人アエネアスに彼らの指揮官になって欲しいと頼み、息子パラスをアルカディア人の騎馬隊とともに彼に委ねる (*Id.* 496-519)。

3. メゼンティウスの悔悛

このあとの『アエネイス』第9巻は、アエネアスがエウアンデルのもとに軍事的支援を求めに来ている間の不在中に起こったトロイア陣営への先制攻撃の様子を語っている。襲撃を行なったイタリア軍の総大将はトゥルヌスであるが、みずから猛烈に攻勢をかけるトゥルヌスと並んで、この城砦をめぐる戦闘にはメゼンティウスも加わっている。彼の戦闘場面は短い、第10巻でメゼンティウスに起こる劇的な変化の下地となっている。

アルケンスの息子が、見事な武具を着て立っていた。
針で刺繍した外套をまとい、ヒベリアの濃い紫に輝いて、
容姿も際立っていた。父アルケンスに送られて来たが、
育ちはマルスの聖林で、まわりをシユマエトゥス川が
流れていた。そこにはパリクス神をなだめる豊穡な祭壇もあった。
メゼンティウスは投げ槍を置き、みずから投弾を取った。
そして革ひもを三度頭のまわりに振り回してしゅっと放つと、
溶けた鉛の弾は正面の敵のこめかみの真ん中を
撃ち割った。その子は倒れ、砂地に広々と横たわった。 (*Aen.* 9.581-589)

この場面はメゼンティウスが年若いトロイア方の兵士を倒す様子を描いている。そこで倒される兵士の名前は述べられず、アルケンスという父親の息子であることのみが繰り返し言及されて強調されている。故郷の田園でのどかに暮らし、親の愛情にも恵まれて育った青年であるが、戦場では防御の機会もないまま無造作に戦闘技能の大きくかけ離れた強敵によって殺されてしまう。この若者の無防備な生命の輝きに対して、それを一瞬のうちに奪い去るメゼンティウスの戦闘動作は無感覚で、何のためらいもなく正確無比である。このメゼンティウスの一撃の描写は、彼の幾多の戦闘スタイルの最初の標本となっているが、同時にまた、彼が自分の死にやがて向かうことになるための最初の重要なモチーフともなっている。なぜならメゼンティウスは、次の巻で語られる最大の会戦の中で自分自身の息子を失うことになるからである⁽¹⁴⁾。

第10巻の大戦闘では、戦陣にもどったアエネアスがトロイア勢とエトルリア人およびアルカディア人の援軍を率いて参戦する。両軍の激突が始まり、イタリア勢の先頭に立つトゥルヌスはやがてエウアンデルの息子パラスを決闘で倒す (*Aen.* 10.439-509)。それを知ったアエネアスは激しく怒り狂ってトゥルヌスを追跡するが、トゥルヌスが戦場から姿を消すと、イタリア勢第二の将たるメゼンティウスと対決する事態となる。そのときメゼンティウスは、自分に懲罰を加えようと戦争に加わったエトルリア人の軍隊とトロイア人の軍勢の両方を相手に猛烈な勢いで戦っていた。だがアエネアスとの決闘では、最初の攻撃でメゼンティウスは足のつけ根に傷を負う (*Id.* 783-786)。そしてあわや止めの一撃を受けようとした瞬間、そばにいた息子ラウススが父親の命を守ろうとして、アエネアスを相手に挑みかかってきた (*Id.* 786-802)。

その間メゼンティウスは息子の盾に守られて敵前から逃げ去るが (*Aen.* 10.800)、若きラウススは、戦闘能力ではるかに自分を上回るトロイアの英雄によって討ち取られる。アエネアスは若者を殺す前に、「死ぬつもりで誰に挑むのか？ 力を越えた無謀というものだ。軽率な男よ、親思いに目がくらんだのか！」 (*Id.* 811-812) と相手を威嚇し、その攻撃を制止させようとした。しかしラウススはそれに耳を貸さず、我を忘れてなおも勇み立つ。するとアエネアスに再び激しい殺意が燃え上る。

今やトロイアの将の胸中に

なおいっそう激しい怒りがこみ上げて、ラウススの最後の
命の糸を、運命の女神たちは摘み取った。アエネアスは強靱な剣を
若者の体の中央に突き通し、刀身のすべてを埋め込んだ。
剣先は貫いた、猛々しい者には軽い武具の小さな盾も、
母親がしなやかな金糸で織った短い衣も。
胸元は血で満たされた。

(*Aen.* 10.813-819)

戦場を支配する論理は、人をいかにして効率的に殺すかである。同盟者パラスを敵将トゥル

ヌスに殺されたアエネアスはすでに復讐の怒りに燃えていたが、その怒りは狂気 (furit: *Aen.* 10.545; furens: *Id.* 604) にほかならず、いかなる戦士をも殺人の鬼にする。「敬虔な人」(pius) と作品中で歌われるアエネアスは、父親を庇って自分に立ち向かうラウスを前にした瞬間、若者の行動に「敬虔さ・親思い」(pietas: 812) を感じ取り、理性を失って燃え立つ相手の戦意を抑制させようとしたけれども、しかしその一瞬ののちには、みずからも抑えがたい殺傷の衝動に身を委ねてラウスを殺す。そして相手がすでに倒れたとき、アエネアスはようやく我にもどりながら、若者の生命が消えていく様子を見て悔やむ。

だがアンキセスの子は、死んでいくラウスの顔と表情が
不思議に青ざめていくのを見たとき、
深い憐れみの念におそわれてため息をつき、右手を差しのべた。
そして親を思う気持ちのいくばくかが心に蘇った。
「おお不憫な子よ、何をおまえの立派な行ないに報いて、
敬虔なアエネアスは何を与えればよいのか、これほどの心ばせにふさわしく。
おまえが喜んで着た武具はそのまま持つがよい。おまえの体も、
もしそんな気遣いに意味があるなら、父祖の霊と灰のところへ返してやろう。
だが不幸な子よ、このことだけは不運な死の慰めになるだろう、
大いなるアエネアスの腕でおまえが倒れたことが。」 (Aen. 10.821-830)

こう言ってアエネアスはラウスの遺体を持ち上げ、みずから進んで敵勢を叱咤してそれを運び去らせる (*Aen.* 10.830-832)。ここで先述した第9巻でのメゼンティウスがアルケンスの若い息子を討つ場面と対比してみると、たしかに第10巻で「敬虔な」アエネアスが示すラウスに対する同情と配慮は際立っており、それに対してメゼンティウスの場合には、若い兵士への感情移入はまったく描かれず、その冷酷な態度は「神々を蔑む者」にふさわしいと言える。しかし戦場の論理からすると、アルケンスの息子の死もラウスの死も、彼らがいずれもより大きく的確な戦闘力を行使しうる敵によって殺されたという戦いの不幸な必然性においては等価である。実際アエネアスは、強敵メゼンティウスに止めを刺そうとした瞬間に立ちはだかったラウスに対しては相手を認識する機会を得、その心の動きを感じ取ったうえで勝負のあとも特別に後悔の念を抱いたが、しかしその場面に先立つ戦闘の描写では、メゼンティウスと比べて少しも遜色のない戦場の悪鬼と化していた。そのことを、詩人は読者に強く印象づけている。例えばトゥルヌスによるパラス殺害後、アエネアスは激怒のあまり、まずスルモとウフェンスそれぞれの4人の息子計8人を、パラスの霊前に生け贄として捧げるため生け捕りにする (*Id.* 517-520)。それを手始めとしてこの英雄は、嘆願する敵たちを何度も憎らしい言葉を放って容赦なく殺し (*Id.* 521-536, 550-560, 575-601)、兵士となった神官さえも足で踏みつ

けて「屠った」(immolat) ののである (*Id.* 537-541)⁽¹⁵⁾。

したがってラウスの死の場面は、戦闘中のアエネアスとしては例外的な情動的反応と言動を描いている。そしてメゼンティウスの死で終わる第10巻の文脈を見ると、その場面の効果は、大きく次の二つの点に要約できるであろう。すなわちその一つは、ラウスの死が「敬虔な」アエネアスによってもたらされたにもかかわらず——あるいはむしろ「敬虔な」アエネアスによってもたらされたからこそいっそう——鮮やかに弱肉強食の冷厳な戦争の法則を反映していることである。またもう一つは、この父への愛情を確かめる場面が、ラウスの死に対する生き残った父メゼンティウスの反応をすでに準備していることである。

第二の点はこのあと詳しく見ていくが、第一の点は第二の点と結びついているので少し説明しておこう。すでに触れたとおり、強者が弱者を抹殺する戦争のならいを至上の真理とし、つねに弱き者を挫く強者たることを自己に課して神々の目もはばからず武力による権勢を誇り、それに執着する典型的な人間は、物語の後半ではメゼンティウスにほかならない（前半には類似の人物として第2巻のトロイア陥落の場面でアキレウスの息子ピュルスが登場するが、彼の描写は短い）。アルケンスの息子が無慈悲に殺したメゼンティウスは、したがって、そのような自分の過去と現在が体现してきたものと同じ論理によって息子の生命を奪われたのである。アエネアスは死んでいくラウスに向かって最後に、「このことだけは不運な死の慰めになるだろう、／大いなるアエネアスの腕でおまえが倒れたことが」(*Aen.* 10.829-830) と述べているが、じつはこの言葉には皮肉な響きが含まれている。というのは、戦場で運悪く死んでも、自分よりも強い勇者と堂々と対決して討たれることは誉れであるというのは、たしかにギリシアのホメロスの叙事詩以来の戦う英雄たちの伝統的なエートスに従っているが、しかしウェルギリウスの作品では、そうした伝統的観念の根底にある戦争を美化する精神は必ずしも肯定されてはいないからである。たとえ「アエネアスの腕で倒れた」としても、ラウスの死は「不運な死」であることに変わりはない。実際このとき若者の埋葬のための遺体の返還を約束するアエネアス自身が、「もしそんな気遣いに意味があるなら」(*si qua est ea cura: Id.* 828) と沈着に付言し、すでに討たれた戦士自身にとっての死後の弔いの価値に対して疑念を漏らしている。そのように詩人は動かしがたい戦争の現実をよく認識しながらも、あえてその非情な戦闘の文脈の中で英雄に若者への「慰め」としてこのように語らせたのであるが、それは、少なくともこのあとの物語の中では、そうした冷酷な現実にもかかわらずラウスの死が無駄には終わらないことをあらかじめ読者に暗示しておくためであろう。

ラウスの死の場面のと、物語の焦点はすぐさま父親メゼンティウスに向けられる。決闘の場を逃れて川辺で休んでいた彼のもとに、やがて息子の死体が運ばれてくるのである。

その間父親は、ティベリス川の波のほとりにいて
傷を清水で洗い、体を休めて

木の幹に寄りかかっていた。青銅の兜は、離れた
 枝に掛けられ、重い武器は草原に休んでいる。
 まわりには選り抜きの若者たちが立っていて、自身は苦しげに喘ぎながら、
 首をさすり、胸には髭が長々と垂れている。
 彼は幾度もラウスの様子を尋ね、何度も使いを送り、
 息子呼びもどすために、憂える父の伝言を差し向けようとする。
 だが失命したラウスの体を、仲間たちが武具の上に乗せて運んできた、
 涙を流しながら、大きな傷を受けた大きなその体を。
 嘆きの声は遠くからも聞こえ、父の心は不幸を予感した。
 彼は白髪を多量の土ぼこりでまみれさせ、両方の
 手のひらを天に向かって差し延べ、その両手で遺体を抱いた。 (Aen. 10.833-845)

ここではメゼンティウスは、もはや暴虐な王でも戦争の鬼でもなく、息子の身を案じる弱い老父として、また突然息子を失って深い悲嘆に襲われる不幸な親として描かれる。両手を天に指し延ばすという動作は、『アエネイス』ではほとんどの場合嘆願を意味する姿勢であり、思いがけない息子の死を前にしたメゼンティウスの大きな驚愕と無力感を表わしている。これまで「神々を蔑む者」(contemptor divum)と繰り返し述べられて、読者に強い反感と恐怖を抱かせてきたこの人物が、ここで突如として人間としての顔を見せ始める。物語はここから、アエネアスに討たれたラウスの死がじつは無駄にはならないことを示していくのである。死んだ我が子を掻き抱いたメゼンティウスのこのあとの言葉は、先のアエネアスの悔やみよりもいっそう悲痛な父親の思いを伝えている。

「おお息子よ、これほど私は生への執着に捕えられていたのか、
 自分の身代りに、我が子を敵の腕に立ち向かわせてしまうとは。
 父が助かったのは、おまえのこの傷のお蔭なのか。
 おまえの死のゆえに生きているのか。ああ、今やついに哀れな私は
 不幸な追放の身になった。今こそ傷は我が身に深く刺し込まれた。
 そのうえこの私は、息子よ、おまえの名を罪で汚したのだ。
 憎しみゆえに王座と父祖の王杖から追われたのだから。
 私は祖国と我が民の憎悪に対して罰を受けねばならなかった。
 私こそ、万死をもって罪深い命を差し出すべきだった。
 私は今なお生きている。まだ人の世と光のもとを去っていない。
 だがもう去るとしよう。」 (Aen. 10.846-856)

ここでメゼンティウスは真剣に悔悛の気持ちを語っている⁽¹⁶⁾。語りの直接の相手は息子の遺体であるから、その真情を疑うことはできない。彼はまず、ラウススが生命をなげうち、父親の自分を救うために死んだことから深い痛恨の念に襲われる。それは、たんに息子が死んだことの悲しみのみならず、自分が敵によって討たれるべきところを息子が身代りに討たれたこと、しかもその子が親である自分への無私な愛情のために犠牲になったことから生じた強い自責の念でもある。

上の引用の最初の行でメゼンティウスは、この瞬間にいたるまで自分が「生への執着 (*vivendi voluptas*) に捕えられていた」(846) と、少し前の敵将との決闘での行動と重ね合わせて自分の人生を振り返る。彼がこれまで行動の規範としてきたことは、強者には弱者の生命を奪う当然の権利があるという神意も顧慮しない信念だった。ところがアエネアスが自分に止めを刺そうとしたとき、メゼンティウスは敵の剣の下から逃亡した。彼は自己の身の安全と生命の保持に心を奪われたまま、自分を庇ったラウススが敵の強刃にさらされて代わりに殺されるのを黙視したのである。彼は息子の遺体を前にして、ラウススの命を奪ったのは、直接的には決闘から逃亡した自分自身ではあるが、そのみならず、究極的には自己がこれまで信条とし何の疑いも抱かなかった強者の論理そのものであることに気づいたのであろう。このようにメゼンティウスは、ラウススの死を、他者に対して配慮せずに傲岸不遜な所業を重ね、固く自己の心を閉ざして生きてきた尊大で自己本位なみずからの生き方の終着点であると見なしているのである。

それまでメゼンティウスは息子ラウススに対してさえも、ここで初めて読者に示されたような父親の情愛を習慣的に圧殺し続け、「父の権威」(*patriis imperiis*: *Aen.* 7.653-654) に忠実にしたがう従順な存在として以上には扱おうとしなかったであろう。しかし今やラウススの予期せぬ献身的な行動と自己犠牲の死は、そのように強固に武装したメゼンティウスの精神の鎧をついに刺し貫き、人としての胸の内側を切り開かせた。この場面でメゼンティウスは、「ああ、今やついに哀れな私は／不幸な追放の身になった。今こそ傷は我が身に深く刺し込まれた」(849-850) と苦しげに語るが、彼がここで初めて深く痛みを感じた「追放」(*exilium*) と「傷」(*vulnus*) とは、それゆえ、エトルリアの領地からの追放やアエネアスから受けた打撃の傷のみを意味するのではないだろう。その象徴的な言葉はむしろ、自己の過去の行為がラウススの死によって開かれた心の鏡に映し出されることの強い痛みと、そしてそこから生じる一種の救済感を表わしている。すなわちここには、過去の自分自身をようやく道義的に認識し、みずから裁こうとする人間の姿が描かれている。

したがってメゼンティウスはこのあと、以前から息子の名誉をも辱めていたこととして、自分が犯した社会的な罪行に触れている。彼は「ラウススの名を罪 (*crimen*) で汚した」(851) と述べ、息子にまで及んだその「汚れ」について、原因は民衆の「憎しみ」(*invidia*: 852) を買ったために王位を失ったことだと言う。ここでメゼンティウスはラウススの不幸を過去にさ

かのぼって眺め、息子をも巻き込んでついには死にいたらしめた自己の所業をまざまざと思い浮かべつつ、胸中にどっと湧いてくる罪責の念を吐露している。そして彼は続けて、「私は祖国と我が民の憎悪に対して罰 (poena) を受けねばならなかった。／私こそ、万死をもって罪深い (sons) 命を差し出すべきだった」(853-854) と悲痛な調子で語り、過去の悪行に対する責任はひとえに自分が負うべきであり、またその罪はみずからの死によって潔く償うべきだったと告白する。こうした言葉によってメゼンティウスは、ラウスの死体を前にして、眼前の息子をも含む自己の暴虐な生き方の犠牲者すべてに対する深い謝罪の念を表わしている。

このあとメゼンティウスは、負傷した足を引きずって立ち上がり、愛馬ラエプスに向かって独白したのち、再び敵と対決すべくアエネアスに立ち向かっていく。詩人は再度の決闘での死にいたるまで彼の勇壮な姿を追っていくが、その最後の場面におけるメゼンティウスの死の意味合いを考える前に、以上の叙事詩中の人物の変容を念頭に置きながら、戦後の撫順での元日本兵たちの心の奇蹟に立ち返って比較検討してみたい。

4. 日本鬼子の悔悟

前述したように、戦後中国の撫順と太原の戦犯管理所に収容された1100余名の元日本兵たちは、めいめいの罪行は異なるとはいえ全員が中国での過ちを問われて拘束されたのであるが、戦犯管理所での待遇は当初から予期に反して手厚いものであった。しかしそれでも彼らは最初、捕虜収容所ではなく「戦犯」管理所という施設の名称などから警戒心を抱き、いずれ自分たちには重い刑罰が下されるのではないかと内心怯えていたという⁽¹⁷⁾。また管理所で働く中国人職員たちも、身近な者の生命を奪うなどした元日本兵たちに対する憎悪と敵意を抑えきれず、初めは多くの所員たちが、例えば自分たちが食べているものよりもはるかに良い食事を戦犯どもにも与えるような、まったく割に合わない好待遇を提供する屈辱的な仕事に対して大きな不満を漏らしていた⁽¹⁸⁾。ところが6年間の収容期間中に、両者の関係はほとんど逆転し、深い友情の絆さえ結ばれた。

このような驚くべき関係の変化は、現実には長い時間とさまざまな体験の積み重ねを経て生じたものであり、十分な紙幅を費やしてはじめて正確に説明できるであろうが、そうした詳しい考察や解説はすでに体験者自身や他の人々の文章や著述の中で試みられている。したがってここでは、筆者の知見の範囲において、とくに元日本兵の心的変化を理解するうえで重要と思われる証言を抽出し、それらにもとづいて考えてみたい。

最初に取り上げるのは、戦中に満州の関東軍の憲兵であった土屋芳雄（1911年生—2001年没）からの聞き取りによって書かれた文章である。土屋は中国の管理所にいた他の多くの日本兵たちと同様、戦後ソ連の捕虜となってシベリアで5年間の抑留生活を送り、1950年から撫順戦犯管理所に収容され、1956年に不起訴により釈放されて帰国した。帰国後は、故郷の山

形県で家業の農業に従事するかたわら、講演や放送番組への出演などによる戦争体験に関する啓蒙活動を精力的に行ない(映画『日本鬼子』にも出演)、また日中友好のための社会的活動にも貢献した。口述を聞き取りによってまとめた著作としては、『ある憲兵の記録』(1985年)⁽¹⁹⁾、『われ地獄へ堕ちん—土屋芳雄憲兵少尉の自分史』(1985年。中国語版『我的忏悔—憲兵少尉土屋芳雄の個人史』1987年、金源訳)、『人間の良心—元憲兵土屋芳雄の悔悟』(2002年)などがあり、さらに、かつてみずから拷問を加えた劉丹華(詩人)との共著『人鬼の角逐(人と鬼との闘い)』(1995年、中国)も出版している⁽²⁰⁾。土屋の人柄は「真面目に尽きる」と、精神科医で作家の野田正彰は『戦争と罪責』において指摘している⁽²¹⁾。思想的には Kommunismus への関心は比較的希薄であり、彼は管理所内での『『人民日報』の日本語訳や毛沢東についての著作の学習会にも、一応つきあっている。だが、共産主義に感心することもなかった』と、同じく野田は述べている⁽²²⁾。

土屋は管理所での認罪の中で、かつて憲兵として中国人を直接・間接的に328人殺し、1917人を逮捕し拷問にかけて投獄したことを思い出して告白した。著作によると、彼の勤務地チチハル市の日本軍憲兵隊本部の正門は中国人から「不帰の門」と呼ばれて恐れられ、そこを拠点として主に「抗日分子」の摘発と弾圧に従事した彼自身、いわば拷問のエキスパートとして大きな功績を挙げ、日本軍では「特高[特別高等警察]の神様」、チチハルの中国人の間では「拷問の魔王」という異名をとったという⁽²³⁾。つまり土屋は、まさに押しも押されぬ鬼憲兵であり、中国人にとっては典型的な「日本鬼子」であった。撫順戦犯管理所では、1954年の春頃から戦犯たちによる自発的な認罪活動が盛んになった。次の引用は、それ以前の1953年、入所時からほぼ3年目の夏の体験を語っている(以下本論のすべての引用文中の[]内は筆者の注または補足)。

私は、口には出さないけれども、真剣な反省を始めていた。

〈日本人戦犯にたいする中国側の親切な対応にくらべて、俺は一体、中国人に何をやってきたのだ。メシも与えなければ、嘆願する中国人をけりとばしたこともある〉。自己嫌悪におちいるばかりであった。そうした想いが、胸にたまり、その水位は、じわりじわりと高くなっていくのが、自分なりにわかった。

八月のある日、私は散髪屋に向かって歩いていた。だいたい月に一回は、散髪があった。また、時々入浴もあり、浴場と散髪室が向かいあっていた。その日、「今日は散髪だよ」といつてきたのは、劉[長東]所員だった。この劉所員は、私がハルピンの道裡監獄[朝鮮戦争勃発のための一時的収容所]にいたとき、どうしたわけか私に目をつけてくれ、彼の命令で食事配りや、佐官組[元上級将校の戦犯グループ]の部屋の掃除をしたことがあった。

その劉所員を先頭に、散髪屋に向かっていった。その時、ふと私は、〈俺は一度だって、中国人を散髪させたことも、風呂に入れさせたこともなかったなあ〉と思った。つづけて、張

惠民 [通ソ・スパイ容疑者] と妻をだまくらかして、張を処刑したことも、八十歳の老母 [土屋が留置して死にいたらしめた女性・閻梁氏の母] を鉄道自殺に追いやったことも頭に浮んできた。罪行が〈グワーッ〉と、頭におしよせてきた。頭をコンクリートにぶちつけ、たたき割ってしまいたくなってしまった。劉所員は、ニコニコして、私たちの先頭を歩いていた。〈バッサリ〉、胸の堰が切れた。〈俺は一体どうしたらいいのだろう〉。いてもたってもいられなかった。涙がこみあげてきた。自分でもどうしようもなかった。目の前がボーとするようだった。私はうろたえた。力の抜けていくのがわかった。そして、ふらふらと、劉所長の前に私は立った。私は、くずれ落ち、平手をついて、土下座をした。

「おい、五十二号 [管理所での土屋の番号]、どうしたんだ」

劉所長のその声は優しかった。

「私は、極悪人 [不好人 (プーハオレン)] だ！ 中国人民にひどいことをしてしまいました。ひどいことをしてしまいました」

床に頭をなすりつけた。どっと、涙があふれ、鼻水もしたたってきた。半狂乱だったといっいい。あたりは静まりかえって、私の嗚咽だけが響いた。自分でもどうしようもなかった。長い、長い時間だった。ひとしきり泣き叫ぶと、劉所長がひざをついて、私の腕をとった。

「よくわかりました。よくわかりました [明白、明白 (ミンパイ、ミンパイ)]。どうか立ちなさい。どうか立ちなさい」

劉所員は、ハンカチを取り出し、私をだきかかえるように立ちあがらせた。彼の手からあたたかい体温が伝わってきた。」 (長岡『われ地獄へ堕ちん』、pp. 182-184)

この体験場面は、表現の異同はあるが上記の土屋の三書のいずれにも詳しく記載されており、また土屋に直接聞き取り取材した野田正彰の前掲書『戦争と罪責』でも解説されている⁽²⁴⁾。それゆえ、土屋本人にとって生涯の転機となる出来事であったに違いない。だが、ここでは、収容期間の初期にはまだ緊張を孕んでいた戦犯と所員の関係が、その後戦犯たちの認罪の本格化とともに急速に変化していくことになるプロセスの根本的部分を先取りした精神的体験として注目したい。

まず、土屋の心中に起こった最初の変化は、管理所での定まった労働もない至れり尽くせりの生活環境の中において、端的に言えば「自分は中国人からこれほどよくしてもらってよいのだろうか」という素直な感慨を抱いたことであり、そしてその感慨が、やはり自然な反応として、「それに比べて自分は何と理不尽な行ないを中国人に対してなしてきたのか」という自責の念を募らせていったことである。このような事態を土屋は「自己嫌悪」と表現しているが、それは言い換えれば、戦中には日本の軍隊の中でつねに硬直した心的状態にあり、自分には見えなかった、あるいは見ようとすることもなかった自己の姿が、管理所のまったく異質な世界

があたかも鏡のような反射装置として作用し、しだいにはっきりと心の目に映ってきたということである。

引用した文章では、その管理所の異質な世界を一身に体現しているのは劉長東所員である。劉所員は当然「鬼憲兵」であった土屋の前歴を知りながら、なぜかかねてから彼に好意を寄せてくれた。当時土屋が劉所員について何か個人的なことを知っていたとは思われないから、土屋にとって劉長東は、たしかに野田正彰が述べるように、「一人の中国人であると共に、彼が死に追い込んだ中国人全体でもあった」⁽²⁵⁾。そこで第二の変化は、まさにこの劉所員との関係の中で起きる。

散髪の日、劉所員はいつものように「ニコニコ」して戦犯たちを散髪室へ連れていく。もちろん第三者から見て劉所員がほんとうにそのとき「ニコニコ」していたのかは問題ではない。肝心な点は、土屋の目に、彼が自分たちに穏やかな笑顔を見せてくれる人物だと映っていたことである。優しく微笑しながら、散髪や入浴などに案内してくれる戦犯管理所員が他のどの国にいらただろうか。廊下を歩きながら土屋は、心地よい「散髪」と温和な「微笑」という情け深く屈託のない世界を目の前にして、かつて自分が中国で犯した鬼の悪行の数々を一挙に思い出した。それは一瞬の脳裏をよぎる想念というようなものではなく、これまで心底に徐々に蓄積していた良心の呵責が巨大な塊となって勢いよく襲いかかってきたのである。土屋の語りは、素朴ではあるがじつによくその瞬間を描いている。彼は圧倒的な過去の心象の力にうちめされ、体の制御さえできなくなった。そもそも土屋は、著作に掲載された写真の若き日の憲兵姿からもわかるように強健な人であるから、そのときの心の動揺のすさまじさは想像するに余りある。すっかり茫然自失して、倒れそうになった彼がとっさに取った行動は、ほとんど無意識的に、つまり人間の自己救済の本能に従い、かつて自分が手ひどく痛めつけた「中国人」すなわち劉長東という「中国人全体」に向かって、深く頭を下げ、ただひたすらに謝罪の念を伝えることであった。

土屋個人のこの出来事は、他の戦犯たちのその後の心の変化の中核的部分を示しているように思われる。戦犯管理所の中で日常的に行き届いた世話を受け、しかもそうした親身な世話をしているのが戦中に自分たちが虐待した中国人自身であるという明白な状況が、彼らの目を自分自身に向けさせ、やがてその心の眼差しは自己の過去の行為を照らし出して、自分は自分を赦すことができないという新たな心境を生じさせた。そして過去を直視しようとする心境は本人にとっては大きな苦しみをともしない、そのつらい苦しみを克服しようとする衝動、いわば抑えがたい精神的リハビリテーションの衝動が告白と認罪へと向かわせたのである。

そのように戦犯管理所で行なわれた認罪は、管理者である中国人たちが強制的に行なわせたものではなかった。そこには戦犯たちとしばしば接する指導員や調査官たちもいたが、彼らは罪行をつぶさに洗い出すことはまったくせず、戦犯たちが自分の意志と力で罪行を人に語れるようになることを最も重視した。そのため認罪の初期段階では、駆け引きはむしろ元日本兵た

ち自身の心中で起こった。例えば、「こんなことまで告白してもよいのか。それを告白すれば、自分は厳罰に処されるのではないか」という惑いは多くの者が経験したという⁽²⁶⁾。また、自身がなした極悪な所業は上位の人間からの命令に従って実行したのであって、自分には大きな責任は問われないだろうという打算が、表面的には認罪をかえって捗らせるという皮相な現象も生じた。しかしそうした葛藤や打算が、結局自分自身の影に怯える狭小な自我に起因する根柢のない迷いであることに、戦犯たちは気づき始めた。その事情について、元第39師団の将校であった戦犯の一人沢田二郎は、みずからをも含む日本軍兵士の心理を見据えて次のように記している。

殺された中国人の身内にとっては、息子が弾にあたって死のうと、娘が強姦された挙句殺されようと、その悲しみに大小はない。しかし殺した側、認罪発表をする者にとっては、この二つの犯罪はまるで性質を異にする。前者は比較的スラスラと書くが、後者はこれを吐き出すのに脂汗を流して苦しむのである。

戦争中の殺人を比較的に平然として認罪する気持ちの奥には、「俺は命令によって動かされた。この戦争は日本軍国主義がやったことで、俺たちは追いつめられて止むなく中国人民を殺したのだ」という理屈がある。こういう気持ちで認罪している限り、それはまだ認罪の門の入り口をウロついているにすぎない。軍隊組織、組織と個人の関係は、そんな機械的な単純なカラクリではないことを〔戦犯管理所での〕学習討論によって既に知っていた。

〔初めて日本の軍隊に〕入営し中国に渡ってくるまでの期間は、まあ命令通りに動くロボットのようなものだったろう。初年兵の刺突訓練〔度胸だめしのために生きた中国人を刺し殺す慣例化した軍事訓練〕では誰しもみな恐ろしさに震えたのである。

しかし、「軍隊」という一大殺人機構の中に組み込まれ、「戦場」という修羅場に放り出されたときから、個々の兵隊は変身を遂げる。上官が一言突撃しろと言ったら、いつでも命を投げ出さねばならぬ、もう背水の陣である。生きて日本に帰れないかも知れぬ、そこで居直る。大なり小なり誰でも居直ってくる。

日本の社会では道徳、倫理、法律、おきて、などに縛られて、じっと意識の底に押さえ付けていた動物的本能、残虐性というものが目覚めてくる。どうせ死ぬんだ、この際思いきりやりたいことをやってやるか。

その対象には事欠かない。どう料理してもよい人間たち〔=中国の人々〕は目の前にいる。このあたりから行動に自分の意志が入ってくる。戦争は人殺しだ。どうせ残虐なことをするのだ。それなら、そのときに自分の残虐趣味をも満足させてやろう。そして上官から命令されるまで待たず、自ら進んで、残虐性を発揮するようになる。建て前は「お国のため」、本音は自分の「獣性の満足」。この二つの顔は、故郷の両親には見せられない顔だ。こうしてはじめて精鋭無比の「日本軍隊」が出来上がる。中国人はこの軍隊を「日本鬼子」と言っ

たのである。 (中帰連編『私たちは中国でなにをしたか』、pp. 135-136)

この沢田の文章は、自分たちの中国での悪行はみずからの意志と欲望にもよるのだとわかっているのだから、もう逃げも隠れもできないし、また逃げ隠れには何の意味もないと悟るにいたった戦犯たちの真情を率直に伝えている (なおここでは「本音は獣性の満足」とのみ述べられるが、他の多くの証言によると、平然と無実の民衆の虐殺、拷問、放火、略奪などを命令ないしは実行した別の重要な動機として、なるべく多くの「手柄」を立てて軍隊内で高く評価されて昇進したい、あるいは逆にそうした作戦などに失敗して地位や面目を失いたくないという利己的な「功名心・出世欲」があったことも見落とせない)。沢田はさらに、こうした新たな認識に続いて起こった戦犯たちの第二の変化について、次のように書き留めている。それは、管理所での認罪活動の高揚の中で、ある元陸軍伍長が行なった報告の発表として記憶に残ったという光景である。

[元伍長の] 認罪報告は最初は型通り進んだ。初年兵のときの刺突訓練、二年兵、三年兵のころの作戦での殺傷、略奪、放火、捕虜捕縛など。これらの内容は、勿論中国人民に対する許し難い罪行であったが、外の者のそれと比較して特別大きいとか残虐無比というものではなかった。しかし、今までの報告者と違っていたのは、具体的事実の内容ではなく、一つの罪行が自分の中の傷をえぐり出すような苦しさをもって語られたこと。人間が人間に対し犯してはならぬ罪行を犯したことの告白であるという点であった。

「私は日本の社会で働く労働者でした。その私が軍国主義にそそのかされて、同じ働く仲間の中国人民をこの手で殺したのであります。そんなことをしてはいけなかったのです。今中国人民の前に心から頭を下げてお詫び致します。

しかし、私が今ここで、どんなに謝っても、私によって殺された中国人民はもう永久に帰ってはこないであります。それを思うと私は……」(ここで絶句して声は出なくなり、むせび泣きに変わっていった)。 (中帰連編『私たちは中国でなにをしたか』、pp. 139-140)

沢田は、あるいはこの記憶は、特定の個人の認罪報告についてではなく、自発的な集団学習の中で、「二、三人の者が互いに批判し影響しあいながら、最も純粹に思いつめ、一斉に叫び出すように、高い水準の認罪に達した」ときの様子が脳裏に焼き付いたものかもしれないと断っている⁽²⁷⁾。いずれにせよ、このような意見の交換を経て、「もうどうなってもよい、何でもさらけ出そう。自分の奥深い内部に隠して、一番恥ずかしく、そして告白するのが恐ろしかった行為も全部言ってしまう。そして未知の世界に飛び込む気で一挙に告白したとき、彼らは中国人の気持ちと立場に決定的に一步近づいた」と、認罪という精神的営為を自分が心底納得いくまで成し遂げたいと思うようになった当時の戦犯たちの心境の変化を描写する⁽²⁸⁾。

そして沢田はさらに、彼らがもっぱら加害者の目から過去を眺めていた以前の状態を脱し、今度は被害者の立場から自分たちの加害の本質を改めて見詰め直す視点を持ち始めたことについて、次のような心象風景を補足している。

その瞬間に[すなわち、そうした互いの認罪報告が進んだとき]改めて自分らの手によって殺された中国人の生の怒り、恨み、号泣、罵声というものが、まるで無声映画が突然トーキー映画になったように、奔流のように聞こえてきた。

今はその奔流の怒りに打たれることがむしろ気持ちが良かった。「そうだよ。アンタ方はもっと怒っていいんだよ。怒る権利があるとも」、じっと頭を垂れて、こう言ってやりたいような気持ちであった。

この時点で彼らは加害者の立場から、被害者の立場に一步踏み込んだのだ。自らの立っている座標が変わったのである。(中帰連編『私たちは中国でなにをしたか』、pp. 141-142)

こうしてこの沢田二郎によって書き留められた戦犯たちの一連の認罪の心的プロセスは、じつはそれ以前、同じ戦犯管理所の廊下において、土屋芳雄が夏のある日に経験した前述の短い出来事の中に集約されていたことが理解できると思う。おそらく土屋の場合、彼の実直な人格に加えて、戦中日本軍憲兵隊の最前線に立って勤務し、殺害・虐待した多数の中国人本人やその身内・仲間との直接的な接触の機会が比較的頻繁であったため、被害者の現実を具体的に想起しやすかったことが、他の戦犯たちに先立って集中的な心の変化を体験した要因であるのかもしれない。しかし他方、沢田が戦犯たちのこうした認罪の到達点として記録している彼らの活動の中には、土屋の回顧録には語られていない、注目すべき点が認められる。それは、戦犯管理所で文化活動として行なわれた日本軍による拷問と強姦の劇の上演に関する記述である。やや長くなるが、その前後の経緯も含めて回想している沢田の文章を以下に引用しよう。

認罪運動、それは苦しい試練ではあったが、通り過ぎてみると一つの宗教的な悟り、法悦といったものにも例えられるような、しずかなそして確かな心境の変化であった。一度その高揚した関門を通過すると、今までとはあまりに違った心境なので、あとで何回も思い出して、もう一度体験したくなるような気持ちである。しかし一方では、この日本軍の残虐なやり方で殺された中国人民の悲鳴と号泣、怒声と訴えの声は、生々しく耳に残っている。それを思うとまた涙ぐみたくるのである。

今は、皆が人間的な感情を取り戻していた。

「人間的」とは一体何か？

この言葉もすっかり使い古され、擦り切れてしまった。

他人の苦しみや悲しみを、素直に自分の苦しみや悲しみとして共感できること。他人が泣

けば、どうして泣くのかそれを理解し、そして共感できたら自分も泣くこと。泣けること。これが人間的なことの第一歩ではないだろうか。

一方に、残虐な方法で殺された一千万人の人があり、その人たちに対し加害者という立場にありながら、なにも感じないという状態こそ、冷酷な非人間であるというべきである。加害者の立場から被害者の立場に一歩踏み込んだときに、この人間的な感情がよみがえってきた。

[引用中略]

このころこういう演劇が作られた。

場面は作戦中、日本軍がなだれこんだ農家の一室である。土間に木の机と椅子がある。片隅に炊事のかまどが見える。見ているものには皆見覚えのある、典型的な中国の小さな農家の内部である。

農夫とその妻がいる。日本兵の軍曹が、部下にこの農夫を縛らせて、問い詰めているところから始まる。

「中国兵がこの部落に逃げ込んでいるはずだ。どこにいる。言え。言わぬか」

足で蹴る。棒で殴る。たちまち頭が割れて血を吹き出す。

「私は知りません」

「お前もその仲間だろう。隠しているんだろう」

「私は知らない。私はこの村で農業をしているだけです」

「嘘つけ」

剣を抜いて腿に突き刺す。女房が悲鳴をあげ、髪を振り乱して軍曹にしがみつく。

「アイヤー、この人は本当に何も知りません。嘘ではありません」

軍曹は棒でこの女房をメッタ打ちにして殴り倒す。農夫に対する拷問が始まる。かまどに突っ込んで真っ赤に焼けた鉄の火かき棒を、まず頭に近づけて脅かし、次に農夫の頬に押し付ける。

「ギャーッ」と叫び、女房はもう一度飛び起きて軍曹に飛び掛かり、蹴り倒される。

軍曹はうすうす感じている。ここまでやって言わぬところを見ると、本当に知らないのだ。だがここで放免すると敵にまわる。殺そうと思う。

女房も軍曹の殺意を読み取る。今までの嘆願哀訴の顔が、サッと変わり、このときから憎しみをあらわにして罵る。最後に夫が刺されたときには、

「日本鬼子 [リーベン・クイズ]」

と大きく叫んで卒倒する。

農夫を演じているのは、元役人をしていた男だ。女房の役は元陸軍大尉である。軍曹をやっている役者は、その顔に見覚えがなかった。おそらく軍隊叩き上げの下士官であった男が、地でやっているように見えた。

中国人を演じている二人は、十年前に、日本兵が中国人を拷問して出させたあの号泣、悲鳴、そして断末魔の絶叫を、いまは自分で出している。それは十分二十分と執拗に続くのである。とくに大尉は、生まれて初めてやる女形の役を延々と演ずる。これは精神的な拷問である。これに耐えられる理由はただ一つ、「本当に拷問されて死んでいった人の苦しみは、これ以上だった」ということである。

第二場は静かな場面である。

農夫の死体が転がっており、部屋の隅では女房が気を失って倒れている。夕暮れが迫った部屋で、軍曹のモノローグ(独白)が続く。

「畜生、往生際の悪い奴だ。てこずらせやがった。早く吐けばいいのに」

「あのアマ、よくもギャーギャー騒ぎやがって、ふてえ野郎だ。おかげですっかりくたびれたよ」

軍曹は倒れた女房を見ている。

科白は途絶え、舞台はシーンとなる。

この沈黙は軍曹の心に沸いた獣欲を示す。

すぐ前の場面で、何もしていない農民が一方的に拷問され、それを目の前にして「日本鬼子」と絶叫して卒倒した女房の声がまだ耳に残っている。その女房をまだ犯そうというのだ。この所業がいかに鬼畜の行為であったか。

観客はつい三、四カ月前に激しい認罪運動を通ってきたものたちである。ストーリーはもう予測している。それでもハラハラしながら、目で軍曹を追いかける。

軍服の色が生々しい。見覚えのあるあのカーキ色なのだが、何かそれが不気味に見える。肩章が鋭くこちらの胸に突き刺さる。

(何でこの軍曹は、こんな頑丈な体をしているのか)

軍曹は倒れている女房をジッと見ている。

(お前は一体、何を思いついたのか)

軍曹はズボンを脱ぎ始める。[前述の沢田の証言でも言及されたように、日本兵は強姦のあと犯行を隠すためにしばしば中国人女性を殺害したが、劇はこのあとどう続いたかは記述されていない]

この劇は成功であった。これは認罪の延長線に出してきた劇であり、いわば「認罪劇」とも言うべきものであった。このテーマは日本人自ら選び出したものである。いままで認罪書に書いてきた罪行を、今度は自ら劇に組み立て形象化し、皆に見せること、これは罪行の再確認ということであった。(中帰連編『私たちは中国でなにをしたか』、pp. 167-171)

沢田自身は管理所のサークル活動では合唱班を指導していた。彼はこの体験の回想に際し、全員の認罪が高まっていた当時、戦犯たちが自主的に催した文化祭では「戦争・平和」以外に積極的に取り組めるテーマは思い浮かばなかったと語り、一般社会で上演すればまるで「泥絵の具を塗りたくったような地獄絵の残酷さ」を露骨に表現したこの劇も、彼らにとっては「演劇の形式を借りた一つの処方」であって、「どうしても一回は通らねばならぬ病後のリハビリテーション（回復のための訓練）」だったと述べている⁽²⁹⁾。沢田が記録したこの劇体験については、野田正彰も精神科医の視点から取り上げており、「ここでは期せずして、ソシオドラマが演じられている」と指摘している⁽³⁰⁾。ソシオドラマ（sociodrama, 社会劇）とは、20世紀の心理社会学者 J. L. モレノ（Moreno）が心理劇から発展させた集団精神療法の一種であり、社会的問題や集団の体験の再演を通じて、社会集団としての人間の心理的障害や心的葛藤を癒す方法である⁽³¹⁾。

しかし、この場合沢田が「この劇は成功であった」と言うのは、管理所でのこの劇の上演と鑑賞が、戦犯たちが人間として再生するための「自分の身体をメスで切り刻むような大手術」としての認罪⁽³²⁾の仕上げを意味したからだけではないであろう。この演劇の準備のために、役者を受け持つ者らが演技の稽古をするのみならず、農家の舞台装置から女の髪にいたるまでのさまざまな道具を戦犯たち全員が協力して丹念に作り上げた。人間としての感情を取りもどして「普通の人間らしく生きてゆける」ために、まるで憑かれたように拷問と強姦の劇の支度に専念し、ようやく上演したこの強烈な劇を観客席からじっと凝視しながら、「生々しい手術の傷あとをソッと確かめている」⁽³³⁾元日本兵たちの姿を、管理所の所員たちは外側からしっかりと見ていた。「忘れてはならないのは、この劇の構成員には〔役者と観客以外の〕第三のグループがいたことである」と野田は的確に指摘している⁽³⁴⁾。この一見陰惨な「ソシオドラマ」の体験者には、その制作と上演を終始陰から見守っていた中国人所員たちも含まれていたのである。

戦中に日本軍の加害をこうむった中国の無数の人々を体現する農家の被害者たちになりきって演じ、また彼らの計り知れない苦痛を我が身のように共感しようと舞台を見つめるこの戦犯たちの様子を目撃して、管理所員たちは、何とか鬼から人間にもどりたいと必死に苦闘するこれらの日本人を心から支援したいという気持ちになっていった。沢田が「劇は成功であった」と語ったのは、この被害者側の中国人の心性の変化をも感じ取ったからである。彼はこの演劇体験の回想を締めくくり、次のように述懐している。

管理所の指導員、班長などは、日本人がそんな風になんか変わってきたことを、自分のことのように喜んでくれているのがよく分かった。何か頼みごとをするとすぐに応えてくれる。「皆の動きを助けてやりたい」という誠意がよく見えた。

あの認罪運動のときは「被害者である中国人民にお詫びします」と皆言ってきたが、この

ころになってやっと、一番身近に被害者の家族がいたと気が付いていた。この管理所の指導員、班長、医者、看護婦、炊事係などみな中国人であった。家族、親戚の誰かを殺され、物を奪われ、家を焼かれ、侮辱され、殴られ、強姦されたといった被害の、一つもなかった人はいないのではないか。そういう人が、過去四、五年も日本人戦犯の世話をしながら、一回も乱暴な言葉を吐いたり、殴ったりしたことはなかった。むしろヤケになって毒づき、暴れたのは、過去残酷な行為をした日本人の方であったのである。

(中帰連編『私たちは中国でなにをしたか』、p. 177)

1956年以降、こうした元日本兵たちが撫順と太原の戦犯管理所から不起訴釈放または刑期軽減によって帰国したあと、日本では彼らの体験を取材したいくつかのドキュメンタリー番組が作られたが、それらが中国で公開・放映された場合、画面に映し出される元戦犯たちは、たいてい字幕の氏名には「先生」という一般的敬称を付して紹介されている。つまり中国人は、この男たちは戦争中「鬼子」だったが、しかし今は自分たちと同じ「人」の心を取りもどしたと考え、普通の人間として処遇しているのである。さらに、撫順戦犯管理所の元所長(二代目)の金源(1926年生—2002年没)は、1984年に元戦犯たちの招待により他の7名の元所員たちとともに来日した際、互いに再会を喜び合ったその歓待の席で次のように語っている。

「皆さまと私たちの友情を、獄中で結ばれた友人という方がいますが、たしかに、かつて私たちは、管理、被管理の立場にありました。この種の人間関係の間で私たちと皆さまのような深い友情を保つことができたのは、古今東西を通じて稀であり、たしかに奇蹟と言えましょう」(熊谷伸一郎『なぜ加害を語るのか—中国帰還者連絡会の戦後史』、p. 45)⁽³⁵⁾

金源は、文化大革命(1966~77年)の最中に、元日本兵たちを厚遇した管理所の長としての責任を問われ、公職を解かれるなどの迫害を受けていたが、その中国内の政変の嵐も収まったのちのこの来日の行事では、600人以上の元戦犯たちから熱烈な歓迎を受けた。こうした元戦犯管理所員たちの訪日と金源の言葉について、編集者・作家の熊谷伸一郎は、その「最大の意味は、かつての加害者と被害者、かつての敵同士が真の意味で和解をなしとげることが可能だということを示した点にあらう」と述べている⁽³⁶⁾。

「撫順の奇蹟」は、最初に中国政府の寛大な方針決定がなければ起こらなかったことは確かである。しかし、国家の最高権威者たちの政治的な指令と指導だけでは、その奇蹟は実現しなかったこともまた疑いえない事実である。それは、戦争の加害者と被害者が、長い時間をかけて心に血を流しながらようやく成功させた、人類共生のための新たな実験であると言える。元日本兵たちは、自己の良心の声と中国人所員たちの真摯な心遣いに応じて、懸命に鬼から人間にもどろうと努力し、他方中国人所員たちは、たえず私怨を胸中に抑えて、彼らを守り信頼し

ようとする姿勢を変えなかった⁽³⁷⁾。このような加害者と被害者双方の人間としての持続的な意志の力がなければ、戦争が残した精神の深い傷は、たとえ国家や組織の間の「連携」「協力」「友好」などの言葉に隠れて人目に触れにくくなったとしても、けっして癒されることはないのである。

5. むすび——メゼンティウスの死と罪の赦しについて

ウェルギリウスの叙事詩では、最大の「鬼」であるメゼンティウスは息子ラウスの死によって心を開かれ、過去の人生の過ちを悔いた。息子の遺体を前にして彼は、身代りに討たれたラウスが暴戾の限りを尽くしたみずからの生き方の犠牲者であり、自己が盲信していた強者の論理の被害者であることを悟ったのである。そしてラウスに対する罪責の念とともに、メゼンティウスの心は、息子の死の背後に横たわる祖国の多数の犠牲者に対する深い罪悪感に襲われた。メゼンティウスをことさら非道な人物として描いた詩人の意図は、こうして「鬼」が「人間」になるプロセスを示すことであったことは明らかである。しかしここでメゼンティウスが、鬼から人間に生まれ変わった、つまり本来の彼とはまったく異質なものに変身したと解釈するのは、厳密に見るなら正確ではないであろう。

メゼンティウスは、『アエネイス』第10巻の戦闘で敵将アエネアスの一撃によって負傷するまではたしかに極悪非道な支配者であり、冷酷無比な戦士として描かれている。しかしそのあと傷ついた足を引きずって川辺に退いた場面では、真剣に息子ラウスの身を案じる父親として描かれており (*Aen.* 10.839-843)、その不安げな様子は、やがて遺体を前にして彼が激しく嘆く場面の序奏となっている。つまり彼はここで、元来親子の情 (*pietas*) にまったく欠ける者ではなく、それをたとえ心のほんの片隅においてではあっても失ってははいない人物として読者に示されるのである⁽³⁸⁾。続く遺体との対面の場面 (*Id.* 844ff) では、メゼンティウスの平素抑圧していたその親の情愛 (*pietas*) は、息子の父に対する献身的行為 (*pietas*) によってさらに強く揺さぶられ、彼の心を急速に目覚めさせる。これは、父のために死んだラウスの孝心 (*pietas*) を、父親の愛 (*pietas*) がしっかりと受けとめた瞬間であり、その時点から彼はもはや反感しか抱かせない鬼ではなく、読者の共感を呼ぶ人間となっている。

したがって読者は第10巻において、メゼンティウスが元来鬼だった者から人間に変貌するのではなく、じつは鬼から元の人間にもどっていくのであり、彼をめぐるドラマは「変身」ではなくむしろ「再生」を語っていることに気づくのである。この再生のプロセスは一方、日本鬼子たちの体験とも通じており、両者の間にはとくに次の二つの共通点が認められる。

まず中国の管理所で元日本兵たちを目覚めさせた最大の動機は、戦犯である彼らに対する管理所員たちのつねに人道的な扱いであった。これはラテン語の *humanitas* とも言える精神的態度であり、この *humanitas* が敵である自分たちに変わることなく示されたため、しだいに

戦犯たちは心の中に消えかかっていた *humanitas* を呼びもどすことができた。この点は、ラウスの *pietas* がメゼンティウスの閉ざされた心に *pietas* を呼び起こしたと類似している。もちろんラウスはすでに死んでおり、それに対し管理所員たちは生きている人々である。しかしラウスは父のために死ぬことによって、アエネアスの言葉に示されるように (*Aen.* 10.825-828)、彼の死そのものが永久不変に *pietas* を意味する行為として生き続けることになった。他方管理所員たちの精神的働きかけは、集団による持続的な日常の世話として表わされた。元日本兵たちは、どの所員からもつねに変わらず人間らしい待遇を受け続けることで、内面を固く武装していた鬼の鎧を脱ぎ捨てていき、自分の中で窒息しかけていた人間らしさを回復していったのである。

メゼンティウスと日本人戦犯の再生に関する第二の共通点は、すでに明らかとおおり、どちらの「鬼」も過去の自分がなした行為を悔いて、深い罪責と謝罪の意識を持つにいたったことである。ただし、そこには異なる点も指摘できる。それはすなわち、メゼンティウスの場合には、前述のように実際に目の前に死んで横たわる息子に対しての生々しい罪責意識を通して、他の多くの人々に対する過去の罪を自覚するにいたるのであるが、それに対し戦犯たちの場合は、過去の行為に関する記憶を取りもどして記述する「認罪」という長い意識的な作業を経たのちに、ようやく自分たちの周囲にいる人々——つまり中国人所員たち——を具体的な被害者として実感するようになったことである。メゼンティウスにとって、死んだラウスは被害者であるが、彼はその親であるがゆえに、自身もまた息子を滅ぼしたおのれの暴虐な生の被害者なのであり、自分が自分自身にとっても憎むべき加害者であった。他方元日本兵たちの場合には、被害者たちとの接触は禁じられ、管理所員たちも被害感情を外には表わさなかった。中国人の現実と生の感情から隔離されたそのような静穏な環境の中で、戦犯たちは頭の中を手さぐりで「被害者」を探し求め、自己の加害事実をみずからの記憶と観念の中で確認していくほかなかったのである⁽³⁹⁾。

さて以上のように、ウェルギリウスが描いたメゼンティウスの悔悛と元日本兵たちの悔悟の体験を比較してみると、そこには詳細な点での相違はあるものの基本的な共通性が認められる。ところが、過去の行ないを悔い改めたあとの経過については、両者は明らかに異なる様相を呈している。なぜなら、メゼンティウスは再びアエネアスに決闘を挑んで悲壮な最期を遂げるが、他方大半の日本人戦犯たちは処罰を免れて無事に故国へ帰り、日本で各々の人生を再開したからである。この違いははたして、罪の赦しが前者には与えられなかったが、後者には与えられたということを示しているにすぎないのであろうか。筆者は、謝罪と赦しの特殊な関係から見れば、両者の結末に本質的には大きな相違はないと考えている。最後にこの点について考察して、本論の結びにしたいと思う。

『アエネイス』第10巻で息子の遺体と別れたメゼンティウスは、愛馬にも最後の言葉をかけ

たあと (*Aen.* 10.860-866)、それに跨るや、「心中には大きな／恥の念と、嘆きの混じった激情が沸きたつままに」(*Id.* 870-871) 敵のもとへ駆けていく。アエネアスは強敵との一騎打ちの再開に喜び勇み、応戦の言葉を放つ。それに対してメゼンティウスは返答する。

「残忍きわまる男め、息子を奪ったうえは、どうして私を脅かすのか。おまえが私を滅ぼせるのは、その方法しかなかったのだ。私は死など恐れぬし、いかなる神々にもはばからぬ。もう黙れ。死ぬつもりで来たのだ。まずはおまえにはこいつを進ぜよう。」 (*Aen.* 10.878-882)

こう言うと彼は、敵をめがけて次々と槍を放つ。だがアエネアスは、その猛攻撃に圧倒されながらも持ちこたえ、かろうじて相手に乗っている馬に一撃を加える。すると馬は主人を振り落とす。地面に倒れたメゼンティウスに対して、アエネアスは剣を抜き、「さあ暴虐なメゼンティウスはどこへ行った、／あの強暴な気力は」(*Aen.* 10.897-898) と言って迫る。こうしてメゼンティウスは追い詰められ、敵に向かって最後の言葉を投げかけたのち止めを刺されて死ぬ。

「苦々しい敵め、どうして罵り、死ねと脅すのだ。殺しても何の咎もない。そんなつもりで戦いに来たのではない。わがラウススも、私のためにおまえとそんな約束を交わしてはいない。だが敗れた敵でも何かゆるしがもらえるなら、これだけを頼みたい。土で遺体を被うことをかなえてくれ。知っているのだ、わが民の激しい憎悪に取り巻かれていることを。その怒りから守ってくれ。息子とともに墓に眠るのを私にゆるしてくれ。」
こう言うと、泰然と喉に剣を受けとめた。
命は武器の上に波うつ血とともに散り去った。 (*Aen.* 10.900-908)

第10巻のこれら二つのメゼンティウスの最後の言葉から、彼がすでに死を覚悟して決闘に向かったことがうかがえる。「死ぬつもりで来たのだ」(881) あるいは「殺しても何の咎もない」(901) という言葉は、決闘にのぞむ英雄の口から出る表現としては異例であり、彼がむしろ死を望んでさえいることを示している。そしてメゼンティウスがみずからの死を受容した理由はただ一つであり、それは、「おまえが私を滅ぼせるのは、その方法しかなかったのだ」(879) と彼が言うように、アエネアスがラウススの命を奪ったことである。しかしここには、アエネアスを倒してラウススの仇を討つという英雄叙事詩なら通常の強い復讐心は見いだされず、メゼンティウスを決闘へと駆り立てたのは、彼の心中に沸き起こる「大きな恥の念と、嘆

きの混じった激情」(870-871)であった。「恥の念」(pudor)は道義的な罪責感を示し、「嘆き」(luctus)はラウスの死に由来する悲しみの感情である。したがってメゼンティウスは、すでに息子の死体への独白の結びで「だがもう人の世と光を去るとしよう」(855-856)と述べたように、我が子を犠牲にしたことへの強い自責の念のゆえに、いわばほとんど自己を処罰する決意をもって戦場にもどろうとしたことがわかる。

こうした意識は、復讐への激しく盲目的な衝動とも、また最愛の子を失ったための無力感や絶望感とも異なり、前非を悔い改めて再生した自我が、過去の過ちを自身の死で償おうとする覚醒した願望に由来している。最後に「泰然と(haud inscius)喉に剣を受けとめた」(907)メゼンティウスの死は、それゆえ、「憤りつつ冥界へ去っていった」(vitaque cum gemitu fugit indignata sub umbras: *Aen.* 11.831=12.952)と描写される第11巻の女戦士カミラの死および第12巻の英雄トゥルヌスの死とは大きく異なる意味を含むのである。彼は死に際にアエネアスに対して、自分の遺体がエトルリアの民から凌辱を受けず、息子とともに無事に埋葬されることを求めている。それは、死による贖罪を経て浄化した自己の魂がラウスの魂と結ばれるに値するであろうと彼が判断したためであろう。メゼンティウスの残虐な支配に耐えたエトルリアの民衆はまだ義憤を収めておらず、したがってこの暴虐な王に対する社会的な赦しは描かれない。しかし詩人は、メゼンティウスにラウスとの死後の合一を敵からの「ゆるし」(venia: 903)として語らせることによって、加害者から見た被害者との一種の和解のあり方を示唆している。死によってラウスが無私な孝心(pietas)を永遠に留めたように、メゼンティウスは「万死をもって罪深い命を差し出す」(854)ことによって、息子と民衆に対する過去の加害を永遠に償えると考えたのである。

一方、中国での認罪を経て帰還した元日本兵たちは、法的な不起訴ないしは軽い処罰の決定によって戦争の罪責に対する社会的赦しを受けた。また彼らは、管理所の元所員たちとも固い友愛の絆を結ぶことができた。そしてそこにいたるまでに彼らが味わった大きな心痛と心労については、すでに述べたとおりである。しかし、こうして中国で赦された戦犯たちは、じつは自分たちが、たとえ法的に赦されて帰国できたとしても、それによって罪をすべて償うことができたとは考えてはいない。むしろ彼らの多くは、まったく逆に、中国から赦されて生きて帰ったためにいっそう深く過去の行ないを悔い続けているのである。このことは、中国から帰還した戦犯たちがどれほど熱心に自己の体験を日本人に語り伝えようと努力してきたか——その半世紀以上の歴史的事実を振り返れば明らかである。そうした戦犯たちの心境について、例えば土屋芳雄はこう述べている。

私はいま自宅に「悔悟の部屋」を設け、私が中国で犯した罪行の反省をつづけている。友だちは、「中国での裁判が終わったのだから、おまえは罪が晴れたのだ」といつてくれる人もいる。ありがたい心づかいである。だが私は、私の戦争加害はそれで晴れたとはけっして

思えない。なぜなら、私に殺害された人たちは、二度とこの世に生きることができないのだ。私がいくら謝ろうにも、その人たちに私の声はとどかないのだ。

私の中国人民への謝罪は、その罪責にくるしみながら、反戦・平和・日中友好のために私の余生を費やすしかないと思っている。(花鳥賊『人間の良心』、p. 282)

戦後五十年がすぎても私は、張惠民さんや閻 [えん] 幼文さんとその家族など、私が殺害してしまったたくさんの人たちが、寝てもさめても見えてしまうのだ。その人たちの悲痛な叫びが夢にも聞こえる。気づくと汗びっしょりになって、体が硬直している。私は、すまなかった、悪かったと必死にいうのだが、その人たちに私の声は届きようがないのだ。

(花鳥賊『人間の良心』、p. 319)

メゼンティウスの場合のように、赦しは与えられなくとも、心中深く罪責の意識を抱いてみずからの死をもって罪を償うことと、戦犯たちの場合のように、赦しは与えられても、生涯を罪の償いに捧げることとの間には、どのような差異があるのだろうか。たしかにメゼンティウスの犠牲者であるラウスはすでに死に、エトルリアの民衆はなお義憤に燃えていて、彼を赦すという現実的状況は成立しえない。しかし彼の償いの意志は真摯なものとして描かれ、その償いは自発的な死という人間がなしうる最大限の犠牲によって完結している。他方中国から帰還した日本人戦犯たちは、法的には赦されたが、それでも自己の罪行は取り返しがつかないものとしてずっと後悔し続けている。あるいは彼らは、生ある限り後悔し続けるべきだと考えている。それゆえ両者は、罪責感と謝罪の念の深さにおいてはほとんど等価であり、ただ異なる点は、罪の赦しが(たとえ部分的なものであっても)与えられたか否かである。これは言い換えると、赦しが与えられるか否かは、必ずしも罪責の念と明確な相関関係にあるのではないということであろう。

被害者に過ちや加害を赦してくれるように乞い求める行為は、一般に「謝罪」(英語 apology, ギリシア・ラテン語 apologia) と呼ばれる。これは、自分の行為の言い訳を述べる「弁解・弁明」(英語 excuse, ラテン語 excusatio < excusare < ex + causa 「(非難の) 原因を取り除く」) とは異なり、みずからの過ちと行為の不当性を認めたくて相手に寛大な態度を求める行為である。一方「赦し」(英語 forgiveness, ラテン語 gratia, clementia) は、言い訳や弁解の正しさを認めて「許すこと」(excuse, excusatio) とは違って、加害者の行為は言い訳や弁解が成り立たない不当なものだと認識し、またその認識を変える根拠や意志がないにもかかわらず、それでも相手に対する報復心や憎悪や反感を捨て去ることである。したがって、もしも加害者の行為に弁解が成り立つ場合には、その行為の正当性(あるいは不可避性)が認められたことになるから、加害者から被害者に「赦し」が求められることはない。「赦し」はあくまでも、加害者も被害者も過去の行為が弁解の余地のない不当なものであったということ

認めたくえで発生するものである。

ところで、以上のように「謝罪」と「赦し」の関係を概略的に説明できるとするなら、加害者が被害者に謝罪し、赦しを求めるという行為は根本的な矛盾を孕んでいるように思われる⁽⁴⁰⁾。なぜなら、加害者が「謝罪」する場合、その人は自分の過ちが弁解できない不当なものだとよくわかっており、また被害者がそのために抱く憤りも当然であると理解しているのに、相手に対して自分への反感や非難を放棄するように求めるからである。もちろん被害者は、加害者の謝罪を受け入れて、その人を「赦す」ことができる。しかし被害者は謝罪を拒否して、相手を「赦さない」こともできるのであり、むしろ赦さないほうが道理にかなった態度である。というのも、繰り返すが、謝罪する人は自分の行為が「ゆるされえない」性質のものと認めているからである。もしも彼がそれを「ゆるされうる」ものだと思っているなら、彼は「謝罪」をせずに「弁解」することを選び、自分の行為が正しかった、あるいはどうしても避けられなかった理由を説明しようとするだろう。

このように加害者が被害者に対しておこなう謝罪という行為には、本心から過ちを悔やんでいるならば相手に要求できる根拠のない「赦し」を求めるという点において、きわめて奇妙な性質が含まれている。これまで見てきたようにメゼンティウスは、過去の過ちに対する罪責と謝罪の念から再生するにいたったギリシア・ローマの叙事詩では例外的な人物だが、物語中で彼はどの犠牲者に対しても実際の行為としては謝罪していないし、また謝罪によって赦しを乞おうという意志も示していない。彼は深い罪の意識のゆえに死を決意して、最も確実な方法でそれを成し遂げただけである。しかし読者は、メゼンティウスの心中の「謝罪の念」には強い印象を受け、そこから彼の死の英雄的な意味合いを鮮明に読み取ることができる。この人物像の創造において詩人が赦しを描かなかったことは、謝罪の念を希薄にしているのではなく、むしろ悲劇的な罪責感を濃厚に感じさせる重要な条件となっているのである。

他方日本人戦犯たちは、中国で謝罪して法的な赦しを得たが、そのために生涯自分は赦されるべきではないと、いっそうの罪責意識を抱いて生きることとなった。そもそも管理所での認罪とその後の裁判では、彼らは重罰を当然のこととして受け入れる覚悟をしていた⁽⁴¹⁾。彼らに与えられた「赦し」は結局、そのような彼らに対する中国からの思いがけない——ある意味で分不相応な——好意の贈り物だったのであり、当然赦されるべきではないと思っていた元戦犯たち自身が、まったく望外のその贈り物の意味を最もよく理解することができた。そのため彼らは帰国後、「詫びて赦されるものではない」と思っていたのに赦されたというこの不思議な成り行きを噛みしめ、自分たちが苦しめたすべての中国人を思えばやはり赦されるべきことではなかったのだと、今日まで深く悔いながら生きてきた。

この生き残った戦犯たちにとって、後悔と自責をやめることは以前の「鬼子」に逆もどりですることであり、過去に恩恵として与えられたほとんど無条件の「赦し」に対する人としての思いが、それをゆるそうとしないのである。だからこそ、戦争の証言を通じて、長い間元戦犯た

ちが語り続けてきた人間としてのそうした真摯で持続的な謝罪の意志は、これまでに多くの中国人の胸を打ってきた。そして、彼らが残してきた罪責の声と悔悟の人生の軌跡は、これからもなお中国人に対して、日本人は必ずしも「鬼子」なのではないことを静かに訴え続けるであろうし、また現在と未来の日本人には、過去の「人殺しのひどい罪を川の水で取り除けると思い」誤って（オウィディウス『祭暦』2.45-46）、いつまでも中国やアジアの人々から「鬼子」（クイズ）と呼ばれることがないようにと——今後の隣人との平和な共生のためのみならず、われわれ自身の精神の健全と救いのためにも——教え諭し続けるであろう。

（本論文は、平成24年度科学研究費補助金基盤研究(C)「ギリシア・ローマ文学における他者との共生に関する研究」の成果の一部であり、この研究課題に関して比較文化論的方法によって考察したものである。）

注

- (1) Cf. P. H. Gries, China's "New Thinking" on Japan, *China Quarterly* 184 (2005), p. 847, n. 68. なお日本鬼子に関する図像学上の興味深い考察としては、武田雅哉『〈鬼子〉たちの肖像—中国人が描いた日本人』（中公新書、2005年）がある。
- (2) 新井利男・藤原彰編『侵略の証言—中国における日本人戦犯自筆供述書』岩波書店、1999年；笠原十九司『南京事件』岩波新書、1997年；秦郁彦『南京事件—「虐殺」の構造』中公新書、増補版、2007年；岡部牧夫・荻野富士夫・吉田裕編『中国侵略の証言者たち—「認罪」の記録を読む』岩波新書、2010年；林博史『BC級戦犯裁判』岩波新書、2005年；杉原達『中国人強制連行』岩波新書、2002年；吉見義明『従軍慰安婦』岩波新書、1995年参照。
- (3) 監督：松井稔、製作：小栗謙一、出演（証言者）：土屋芳雄、永富博道、船生退助、絵鳩毅、湯浅憲、篠塚良雄、榎本正代、金子安次、鈴木良雄、小山一郎、鹿田正夫、富永正三、久保田哲二、小林武司。
- (4) 中国帰還者連絡会（以下「中帰連」と略す）編『私たちは中国でなにをしたか—元日本人戦犯の記録』新風書房、1995年、p. 219.
- (5) 岡部・荻野・吉田編『中国侵略の証言者たち』、pp. 3-27；中帰連編『私たちは中国でなにをしたか』、p. 231参照。
- (6) 『季刊 中帰連』14 (2000), 15 (2000)；坪田典子「戦争責任の認識—〈撫順の奇蹟〉」『文教大学国際学部紀要』17-1 (2006), pp. 29-43；同「加害の戦争責任—「撫順の奇蹟」を事例として」『日本オーラル・ヒストリー研究』4 (2008), pp. 123-141；SATO Kazuo, The History of Modernization in Japan and the "Foundation of Freedom", 『千葉大学教育学部研究紀要』59 (2011), pp. 253-258.
- (7) 大澤武司「「人民の義憤」を超えて—中華人民共和国の対日戦犯政策」『軍事史学』44-3 (2008), pp. 41-58；岡部・荻野・吉田編『中国侵略の証言者たち』、pp. 23-27参照。
- (8) 本論で参照したメゼンティウスに関する研究は以下の通り。H. W. Benario, The Tenth Book of the *Aeneid*, *Transactions & Proceedings of the American Philological Association* 98 (1967) pp. 25-36; Fr. Blaive, Mézence le Guerrier Impie: Mythologie indo-européenne et épopée romaine, *Latomus* 49 (1990), pp. 81-87; Fr. Blaive, De Ravana à Mézence: dégradation du mythe indo-européen et du Guerrier Impie à Rome, *Latomus* 51 (1992), pp. 73-78; F. Burke, Jr., The Role of Mezentius in the *Aeneid*, *Classical Journal* 69 (1974), pp. 202-209; A. Cartault, *L'Art de Virgile dans l'Énéide*, Paris, 1926; G. B. Conte, *The Poetry of Pathos: Studies in Virgilian Epic*, ed. By S. J. Harrison, Oxford, 2007, pp. 163-165, 193-195; P. T. Eden, *A Commentary on Virgil: Aeneid VIII*, Leiden 1975; H. C. Gotoff, The Transformation of Mezentius, *Transactions & Proceedings of the American Philological Association* 114 (1984), pp. 191-218;

- S. J. Harrison, *Virgil, Aeneid 10*, Oxford, 1991; A. La Penna, Mezentius, A Tragedy of Tyranny and of Ancient Titanism, in: Ph. Hardie (ed.), *Virgil: Critical Assessments of Classical Authors*, Vol. IV, London/New York, 1999, pp. 345-375; F. A. Sullivan, S. J., Mezentius: A Virgilian Creation, *Classical Philology* 64 (1969), pp. 219-225; R. D. Williams, *The Aeneid of Virgil, Books 7-12*, Basingstoke/London, 1973.
- (9) 常石敬一『七三一部隊—生物兵器犯罪の真実』講談社現代新書、1995年；同『医学者たちの組織犯罪—関東軍第七三一部隊』朝日文庫、1999年参照。
- (10) 中帰連編『私たちは中国でなにをしたか』、pp. 119-120参照。前述の映画『日本鬼子』の中で榎本正代(元陸軍曹長)は、戦時中中国人女性を強姦・殺害したあと、上官と合議して彼女の肉を料理して兵士たちに食べさせたと証言している。そしてその味は「豚肉よりもおいしくらいだった」と事実をありのままに伝えている。
- (11) 朝日新聞社山形支局『聞き書き ある憲兵の記録』朝日文庫、1991年、pp. 89-91参照。
- (12) Servius ad *Aen.* VIII, 479; cf. Eden, *op. cit.*, p. 140.
- (13) 中帰連編『私たちは中国でなにをしたか』、pp. 211-212参照。
- (14) この場面の解釈については、cf. Burke, *art. cit.*, pp. 204-205.
- (15) このアエネアスの戦闘場面については、cf. R. G. M. Nisbet, Aeneas Emperor, in: F. Robertson (ed.), *Memnisse Iuvabit: Selections from the Proceedings of the Virgil Society*, Bristol, 1988, p. 231; R. O. A. M. Lyne, Virgil and the Politics of War, *Classical Quarterly* 33 (1983), p. 194.
- (16) このメゼンティウスの言葉に関して、Gotoffは“Mezentius is not a morally reformed character” (*art. cit.*, p. 203) と述べ、この人物の悔悛を否定するが、筆者はその見解を採らない。Gotoffの解釈は、とくに850行の“exilium”「追放」の代わりに異読の“exitium”「死」を採ったところに大きな不備がある。“exilium”の読みとメゼンティウスの後悔については、cf. R. D. Williams, Two Passages from the *Aeneid*, *Classical Review* 11 (1961), pp. 195-197; M. Dewar, Mezentius' Remorse, *Classical Quarterly* 38 (1988), pp. 261-262.
- (17) 中帰連編『私たちは中国でなにをしたか』、pp. 10-14；岡部・荻野・吉田編『中国侵略の証言者たち』、pp. 30-32参照。
- (18) 孫明斎「撫順戦犯管理所長を勤めて」『季刊 中帰連』2 (1997)；中帰連編『私たちは中国でなにをしたか』、pp. 218-219参照。
- (19) 注(11)参照。
- (20) 長岡純夫『われ地獄へ墮ちん—土屋芳雄憲兵少尉の自分史』中日出版、1985年；中国語版、金源訳『我的忏悔—憲兵少尉土屋芳雄的个人史』群衆出版社、1987年；花鳥賊康繁『人間の良心—元憲兵土屋芳雄の悔悟』北の風出版、2002年；土屋芳雄・劉丹華『人鬼の角逐』遼寧文藝出版社、1995年。
- (21) 野田正彰『戦争と罪責』岩波書店、1998年、p. 243。
- (22) 野田、前掲書、p. 269。
- (23) 長岡『われ地獄へ墮ちん』、p. 105；花鳥賊『人間の良心』、pp. 169, 182参照。
- (24) 野田、前掲書、pp. 271-272。
- (25) 野田、前掲書、p. 273。
- (26) 岡部・荻野・吉田編『中国侵略の証言者たち』、pp. 34-35；中帰連編『私たちは中国でなにをしたか』、pp. 85-90参照。
- (27) 中帰連編『私たちは中国でなにをしたか』、p. 140。
- (28) 中帰連編『私たちは中国でなにをしたか』、p. 141。
- (29) 中帰連編『私たちは中国でなにをしたか』、pp. 167, 172。
- (30) 野田、前掲書、p. 123。
- (31) Cf. J. L. Moreno, *Who Shall Survive?: Foundations of Sociometry, Group Psychotherapy, and Sociodrama*, Beacon, N.Y., 1953, p. 87: “Sociodrama has been defined as a deep action method dealing with inter-group relations and collective ideologies” ; p. 88: “The sociodramatic approach deals with social problems and aims at social catharsis.”
- (32) 中帰連編『私たちは中国でなにをしたか』、p. 172。

- (33) 中帰連編『私たちは中国でなにをしたか』、p. 172。
- (34) 野田、前掲書、p. 124。
- (35) 岩波書店、2005年。
- (36) 熊谷、前掲書、p. 45。
- (37) 撫順戦犯管理所に収容された元第39師団中隊長の富永正三は、その著書『あるB・C級戦犯の戦後史—ほんとうの戦争責任とは何か』(水曜社、1977年、pp. 78-79)の中で、認罪の頃の自己の心境と中国人刑員たちの姿勢について次のように述べている。「人間から鬼への転落に際しても、非人道的な命令に従うか、従わないか、人間の道か、鬼畜の道かはみずから選択したもののなのである。如何なる名医も、その助言をきき入れない患者の病気をなおすことはできない。助言を聞き入れるか、聞き入れないかは本人の決定によるのである。病気は医者がおすすのではなく病人自身がおすすのである。指導員からしばしば聞かされた「明暗いずれの道をとるか、それは君たちが決定することである」というのは、このことではないのか。一方、中国人民は、私たちに何かを強制することを避け、私たちの自覚をうながすための努力を重ねた。看守に当たった班長たちは、収容された当初の私たちの反抗的態度、罵詈・雑言に対して夜の批判会で口をふるわして憤慨したということである。しかし、個人的感情を抑えることが工作の原則として強調され、指導員自身も感情が激してくると、かくし持った鏡でそれとなく顔を写して反省していたという。このように中国人民の血のにじむような精神的援助が、われわれに対しておこなわれたのである。」
- (38) Cf. La Penna, art. cit., p. 370: “The turning-point does not create, but presupposes, the *pietas* of the old tyrant for his son.”
- (39) 実際、土屋芳雄の証言によると、入所4年目にしてようやく中国政府から管理所に派遣されてきた取調官たちは、戦犯たちに対して「被害者の立場にたってよく考えてみなさい」といった忠告を繰り返し与えるのみで、取り調べの調書などは一切取らず、紙と鉛筆を渡して自分で思い出して書くよう指示した程度であった(長岡『われ地獄へ墮ちん』、p. 186-192; 花鳥賊『人間の良心』、p. 263-271)。また土屋の場合、認罪の期間中に彼の罪行を列挙した中国人たちの告白書や多数の被害者からの告訴状などを読むように求められ、「事実でないものは保留してもいい」と言われて目を通したが、どの内容も事実であることを確認したところ、不思議にも担当官は「ずいぶん進歩したなあ」と褒めて喜んでくれたという。その体験について土屋は、「あとで考えてみるとこれは、認罪することで私たちが真人間にもどることを喜ぶ、いわば親心のようなものだったろうと思った」と語っている(花鳥賊『人間の良心』、p. 269)。
- (40) 「謝罪」に内在するこの問題を Hallich は “the paradox of apology” と呼び、興味深い考察を行なっている。Cf. O. Hallich, A Plea against Apologies, in: M. R. Maamri, N. Verbin & E. L. Worthington, Jr. (eds.), *A Journey through Forgiveness*, Freeland, Oxfordshire, 2010, pp. 9-25.
- (41) 例えば元満州国の高級行政官で、1956年の瀋陽での特別軍事裁判では刑期18年の判決を受けた戦犯・古海忠之(約7年後に満了前釈放)は、その裁判の証言の中で低頭して謝罪し、裁判官に対して「どうか極刑を与えられんことをお願いします」と、自己が当然死刑に値するという認識を明確に表明している(2008年11月、NHK衛星放送番組「認罪—中国 撫順戦犯管理所の6年—」などで放映された裁判の実写記録映像より)。戦犯管理所でみずからのすべての犯罪を認識・告白して不起訴となった他の大半の戦犯たちと同様に、この裁判で起訴された45名は全員、告発された罪状をほぼそのまま認めた(岡部・萩野・吉田編『中国侵略の証言者たち』、pp. 20-21参照)。この点は、ユダヤ人大量虐殺の罪責を全面的に否認して無罪を主張した元ナチスの高官アドルフ・オットー・アイヒマンのエルサレム裁判(有罪判決の結果1962年に絞首刑)、また第二次世界大戦中の戦争犯罪の責任を最後まで認めようとしなかった28名の日本人A級戦犯に関わる極東国際軍事裁判(東京裁判:1948年の判決で東条英機以下7名が絞首刑、死亡者と精神異常者3名を除く他の18名は終身ないし有期禁固刑)の様相と大きく異なっている(坪田「戦争責任の認識—撫順の奇蹟—」、pp. 31, 36-42参照)。

Abstract

Mezentius and the *Japanese Devils* (Riben guizi):
A Comparative Study of Virgil's Epic and a Historical Experience of Japanese Soldiers

OGAWA, Masahiro

In 1956 more than 1,000 Japanese soldiers who had been detained for six years in the Fushun and Taiyuan War Criminals Management Centres of the People's Republic of China were released without any punishment after their painful confessions of all the sinful acts committed in China during the Second World War and their heartfelt apologies to the Chinese. This unusual event has been called *the Miracle in Fushun*. The present paper discusses the process of how these typical *Japanese Devils* (*Riben guizi* in Chinese) were mentally rehabilitated and morally reformed to be ordinary *human beings*, by closely comparing their case with that of another most devilish character who appears in Virgil's *Aeneid* and is also spiritually regenerated after the death of his son: Mezentius, the Etruscan cruel tyrant and terrible warrior.

In conclusion it will be pointed out that, although the Japanese war criminals were legally forgiven by the Chinese government and Mezentius, having no more intention than opportunity of seeking forgiveness, punishes himself by facing death resolutely, the difference does not affect the sincerity of the ex-Japanese soldiers' repentance, especially because they have been feeling and even trying hard to show publicly, since the unexpected merciful judgement of the Chinese, all the deeper remorse for their past crimes and the stronger desire for lifelong atonement to the victims who were sacrificed by them to the Japanese invasion of China and their own brutality.